

2025

1

No. 741

# 國學院大學 學報

国学院大学

令和7年1月20日(月) 定期号(毎月20日発行) 1部20円  
[発行]国学院大学 [編集]総合企画部広報課 TEL 150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話]03(5466)0130 [FAX]03(5466)0528祭 儀 月次祭 2月1日(土) 午前10時 仮殿 建国記念祭 2月11日(火・祝) 午前11時 仮殿  
天長祭 2月23日(日・祝) 午前11時 仮殿

「冬の光り」  
みなぎらふ冬の光りの  
書深く  
あたゝまりなし。  
子らの鳥膚  
『倭をぐな』  
駅 沼空



4・5面に関連記事

新たな可能性が秘められた、未知の学問。国学をそんな発想で捉え直そうとしているのが、松本久史・神道文化学部教授だ。凝り固まつた国学像を解きほぐし、既に定められた思想の解釈に終始するのではなく、道を模索する松本教授は言う、国学は「終わった」学問ではない、と。総合知としてのポテンシャルを秘めた、いまだ完全には知られざ

## みはるかすもの

年が明けた。令和7年の干支は「向上心を持つ努力を重ね、物事を安定させていく」という意味合いを持つ「乙巳」である。昨年は学生、特に運動系部会の活躍が目覚ましい年であったので、今年も継続していくことを、まずは期待したい。また、今年の秋には日本で初めてとなる「東京2025デフリンピック」の開催が予定されている。デフリンピックは「耳がきこえない、きこえにくい人のためのオリンピック」であるが、東京で開催された世界選手権から出場する選手・役員ばかりで

なく、開催に向けて尽力する関係者の努力が、世界の共生社会の形成に向けた人材育成への大きな契機になることも期待したい。さらに、乙巳は「蛇のように再生や変化を繰り返しながら、柔軟にかつ着実に進化し続ける」年とも言われている。今日の大學生においては、少子化問題だけではなく、社会の多様性をはじめとして、加速する世の中の変化への対応を急がなければならぬ課題が山積している。こうした諸課題に対して、柔軟かつ着実に対応できるよう、力を合わせてしっかりと取り組んでいきたいた。そして、スポーツ活動ばかりではなく、文化活動においても、固定観念にとらわれず、新しい考え方や方法を積極的に取り入れることで、「成長」や「変革」を成し遂げる一年になることを願うものである。

## 箱根駅伝 総合3位 監督・選手コメント

K:DNA  
I・II面

## 歳旦祭を斎行



歳旦祭（斎主）星野光樹・神道文化学部准教授、神殿奉斎員が1月1日、国学院大学渋谷キャンパスで執り行われた。祭典には、佐柳正三理事長、写真、針本正行学長をはじめ、法人・各設置校の役教職員、来賓らが参列。斎主が祝詞を奏上し、本年の平安と法人の隆盛を祈念した。

祭典終了後、あいさつに立った佐柳理事長は「少子化という厳しい環境を乗り越えるため、中期5カ年計画を着実に実行していただきたい」と述べた。続けて、針本学長は「生成AIによる急速な社会変化の中でその回答を批判的に受け止められるよう人材育成に取り組み、学生一人一人の思いに寄り添いながら大学の見直しを行っていきたい」とあいさつした。

# 年頭所感



## オール国学院で「強い組織」を実現

令和7年の新春を迎え、謹んで御祝詞を申し上げます。

顧みますと昨年は、大学は創立142周年を迎えて、ソフトラニス部の女子がダブルスで全国2連覇、陸上競技部が出雲駅伝と全日本大学駅伝で優勝し大学三大駅伝2冠の快挙を遂げるなど、部員一丸となって目標を目指し「強い組織」づくりに成功した部会が目覚ましい活躍を魅せた一年がありました。また、法人傘下の教育機関においては、国学院大学久我山中学高等学校が創立80周年、国学院幼稚園が55周年を迎えることができました。これもひとえに関係各位のご支援のおかげと感謝しております。引き続き、本法人の

教育理念にご賛同くださる多くの方々のご支援を得ながら、学生生徒園児らが安心して学べる学園づくりに取り組んでまいりたいと思います。

さて、創立140周年記念事業の一つである神殿造替と境内整備事業は、旧神殿のままプラザキャンパスへの移築が昨年12月中旬に完了、渋谷の新殿も間もなく竣工する予定で、御祭神を新しい御殿にお遷しする本殿遷座祭を本年4月中に斎行する予定です。本学のシンボルである新しい神殿をぜひご参拝ください。

昨今の学校法人を取り巻く厳しい状況を乗り越えてゆくためには、「強い組織」づくりを急がねばなりません。そのためには、一人一人が中期計画における各組織のビジョンや目標を共有して、自分自身の役割をしっかりと理解し、自ら主体的に関わり、状況に応じた的確なコミュニケーションを図りながら一丸となって取り組んでゆくことが重要です。私ども役教職員は、「オール国学院」で「ONE FOR ONE」な組織を目指し邁進してまいりますので、更なるご支援ご鞭撻のほど心からお願い申しあげます。

本年が皆さまにとってより良い一年となりますようご祈念申し上げ、年頭のごあいさつといたします。

## 理事長 佐柳 正三



### 豊かな学修環境、学修支援を

#### 学長 針本 正行

あらための年を言祝ぎ申し上げます。

令和4年度に開設した「観光まちづくり学部」は、本年度で3年目を迎えました。現在も、全国各地で発生している自然災害は、地域社会の在り方、そこに生活をされている方の生き方に大きな影響を与えていました。このような時にあって、観光まちづくり学部が掲げる「地域を見つめ、地域を動かす」という持続可能な地域づくりを目指すテーマはとても重要です。この課題を具現化するために、現在、10を超える地域と「包括連携協定」を結び、研究交流や学生のフィールドワークの環境を整えています。今後も、地域

との連携を積極的に進めています。

また、本学では、海外の大学とネットワークをつくり、本学での学びや日本の文化を再認識するとともに、留学先の大学で専門学術分野を外国语で学び、新たな視点やアプローチを習得することができます。このプログラムは、政府の「AI戦略」に基づき、持続可能な社会を支える人材育成を目指しており、文部科学省からの認定を受けました。また、令和7年度は教学IRのシステム整備を本格化させ、学生の学修成果の可視化にも取り組み、学生一人一人の学びが充実したものとなりました。今年2月には、学生交換の枠組みを利用した短期留学グループをル・アーブル・ノルマンディーに派遣します。

さらに、本学では、令和3年度から共通教育科目として「データサイエンス教育プログラム」を開設し、数理・データサイエンス・AIに関する基礎知識と技術を提供しています。このプログラムは、大学との学生交換を推進しています。令和6年度には、ノースウェストミズーリ州立大学（米国）およびル・アーブル・ノルマンディー大学（仏国）との学生交換を始動させました。また、今年2月には、学生交換の枠組みを利用して、良い一年となりますことを心から祈念申し上げます。

## 蛇のヌシ、守り神の蛇

### 年頭コラム 今年の干支にちなんで



文学部教授 伊藤龍平

奄美の田舎道を歩いていると、時折「用心棒」というハブ除けの棒が立てかけてあるのを目にする。この用心棒で足元をたきながら歩くとハブに咬まれないという。ハブは人を死に至らしめる猛毒を持つが、積極的に人に襲いかかることはない。

日本の河川沼澤にはヌシと呼ばれる人間に踏みつけられそうになった時に吃驚して反射的に咬みつくのだ。要は、ハブがいそうな場所には足を踏み入れなければいい。これはヌシ（主）との関係にも言えることであっても人にとって水は不可欠なものであるため、対立は避け難い。それでも人にとって水は不可欠なものが共存の鍵になるが、ヌシにとつても人にとって水は不可欠なものであるため、対立は避け難い。

8世紀初頭の『常陸國風土記』には水田開発と堤防建設の際に一度にわたくて人と夜刀神（角のある蛇の姿をしている）が衝突した話があり、ここにヌシ伝承のエッセンスがある。各地の伝承を見ていくと、ヌシへの対処法には、(1)退治する、(2)追放する、(3)封じ込める、(4)祀り上げる、(5)契約を交わす、(6)ヌシをヌシのまま利用する……等々があることが分かる。興味深いのが(6)のケースで、旱魃の折にヌシの力を利用して雨を降らせるのだ。埼玉県鶴ヶ島市の脚折雨乞もその一つ。住民たちは池のヌシの大蛇に雨を降らせてもらっていたが、ある時、大蛇が別の池に移り（ヌシが引つ越す話は例が多い）雨が降らなくなってしまった。そこで人々がその池に赴いて水を持ち帰らせるのだ。

脚折雨乞もその一つ。住民たちは池のヌシの大蛇に雨を降らせてもらっていたが、ある時、大蛇が別の池に移り（ヌシが引つ越す話は例が多い）雨が降らなくなってしまった。そこで人々がその池に赴いて水を持ち帰らせるのだ。

## 大塚製薬株式会社と 包括連携協定を締結

国学院大学（学長：針本正行＝写真右）と大塚製薬株式会社（首都圏第一支店支店長：伊藤徹也＝同左）は昨年12月13日、教育・研究等の分野において相互に協力し、社会の健康増進に寄与することを目的とした包括的な連携に関する協定を締結した。

今後は、さまざまな分野で協力・連携を進める予定。



## 司法試験・公務員試験合格者等から ノウハウ学ぶ「合格者と語る会」

全学部の学生を対象とした法学部主催の「合格者と語る会」が昨年12月11日に渋谷キャンパスで開催された。公務員試験、法科大学院入試、司法試験に合格した法学部の4年生や卒業生ら8人が、貴重な体験談を参加者と共有した。

公務員試験合格者は「苦しい時期もあるかもしれないが、一人で抱え込まず、周りのサポートを頼りながら頑張ってほしい」と語り、法科大学院入試の合格者からは、志望校の選び方や使用した教材などが紹介された。また、司法試験合格を果たした卒業生は、在学中から司法試験合格までの勉強法や過ごし方を振り返りながら、後輩たちにアドバイスを送った。

## 日本の笑いを英語で実演「英語落語セミナー」

昨年12月20日に文化発信型英語力開発活動「鹿鳴家英楽の英語落語セミナー」が渋谷キャンパスで開催された。本セミナーは、文学部外国語文化学科が企画・主催し毎年開催しているもので、今回も昨年に引き続き、鹿鳴家英楽師匠＝写真＝が講師を務めた。

英楽師匠は途中、解説を交えながら「天狗裁き」と「長短」の二席を披露。分かりやすい英語で、しぐさや声色を巧みに操って演じ、会場は笑い声に包まれた。セミナー後半では、参加した学生や教員らが実際に高座に上がり実践する場面もあり、参加者たちは英語落語の魅力をかみしめていた。



## 武岡毅選手

### 柔道グランドスラム東京 66kg級連覇

昨年12月7日、東京体育館で開催された柔道のグランドスラム東京2024男子66kg級において、武岡毅選手（令4卒・130期日文、パーク24）と藤阪泰恒選手（平31卒・127期健体、パーク24）の2人の院友（卒業生）が決勝戦で対決。武岡選手が小外掛け一本勝ちし、グランドスラムパリ2024に続きグランドスラム連覇となった。

## 久我山中学高等学校保護者対象 大学見学会を開催

昨年12月4日、国学院大学久我山中学高等学校の生徒の保護者を対象とした「国学院大学見学会」が開催され、保護者と教職員ら約100人が渋谷・たまプラーザキャンパスに来校した。

午前中には、たまプラーザキャンパスでキャンパスツアーが行われ、各学部の特徴的な教室や施設を見学。午後は渋谷キャンパスへ移動し、矢部健太郎文学部長（教授）が「国学院大学の特徴」と題し、大学の歴史や学問的な背景について講演した。その後、学生アドバイザーの案内でキャンパスツアーを実施。保護者らは有栖川宮記念ホールや学術メディアセンターなどを見学し、学生たちとコミュニケーションを取りながら交流した。

## 令和6年度 国際研究フォーラム開催 変容する伝統宗教文化を多面的に議論



国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所は昨年12月15日、「つむがれの力タリとカタチ」と題した令和6年度の国際研究フォーラムを、渋谷キャンパスで開催した。伝統宗教文化が時代とともに

に変化しながら現代につむがれてきた現状を、どのような「言葉（カタチ）」と「物（カタチ）」で表現しているかについて、同研究所の星野靖二・研究開発推進機構教授の司会で多面的に議論が交わされた。

最初に、東北大学のオリオン・クラウタウ准教授が「和国教主とその教訓・聖徳太子と憲法の近代」と題して報告。聖徳太子が作成した憲法十七条について、明治期の「国体」という統治思想の観念から戦後の民主主義の基本へと、解釈が変遷していく経緯を多くの文献を引用し詳細に分析した。

次に和光大学の君島彩子講師が「平成時代の仏像と信仰」に関して、仏像の美術としての側面と信仰の変化について考察。戦前は美術として評価されていた仏像が戦中は「護国」や「鎮護」のシンボルとして制作され、戦後は平和への祈りや戦争死者の慰靈の象徴になつたと指摘。さらに高度経済成長期は鉄筋コンクリート製（後に軽量なFRP製も）の巨大仏像が多数建造され、バブル崩壊後はサブカルチャーとしての仏像フィギュアが誕生したと、仏像の「カタチ」の変遷について説明した。

最後に米国の大学で学んだ日本古来の伝統文化への憧れ②アニメをきっかけとした日本のポップカルチャーの魅力③オープンで寛容な宗教への興味

についての理由として、①

日本古来の伝統文化への

憧れ②アニメをきっかけ

とした日本のポップカル

チャーの魅力③オープン

で寛容な宗教への興味

」などを挙げた。

3人の報告を受け、コメンテーターとして宗教美術全般に造詣が深い新潟大学の細田あや子教授が「伝統的な宗教が現代において変化、変容する局面が具体的な事例によって明らかになり、大変興味深い発表だった」と感想を述べた。また、主催者を代表して同研究所所長の平藤喜久子・神道文化学部教授が「若手研究者の最新の研究を聴き、とても刺激を受けた」とあいさつした。

最後に総合討議が行われ、参加者は熱心に質問をして、「現代宗教文化」に関する関心の高さを示す。最後に懇親会が行われ、現職保育者院友と同学科の教員らが「保育職をめざす学生の保育職の魅力」について意見交換を行った。後半は、就職活動を控えた3年生が少人数グループに分かれ、それらが「職」の魅力を語った。後半は、就職活動を控えた3年生が少人数グループに分かれ、それらが「職」の魅力を語った。

現職保育者院友と学生との交流会は、前半に塩谷香・同学科教授のファシリテーションのやりがいや魅力、勤務経験を通じて得た学びなどについてパネルディスカッション形式で語った。後半は、就職活動を控えた3年生が少人数グループに分かれ、それらが「職」の魅力を語った。

現職保育者院友と学生との交流会は、前半に塩谷香・同学科教授のファシリテーションのやりがいや魅力、勤務経験を通じて得た学びなどについてパネルディスカッション形式で語った。後半は、就職活動を控えた3年生が少人数グループに分かれ、それらが「職」の魅力を語った。

現職保育者として幼稚園・保育園に勤める人間開発学部学生も支援学科の卒業生（院友）と、保育者を志望する同学科の学生が交流する「現職保育者院友と学生との交流会」および、現職保育者の院友に継続的な学びの機会を提供し、保育者同士の横のつながりを構築することを目的とした「現職保育者院友対象ホームカミングデー」が、昨年12月14日にたまプラーザキャンパスで開催された。これらは、文部科学省の委託事業「大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力」による。

現職保育者院友と学生との交流会は、前半に塩谷香・同学科教授のファシリテーションのやりがいや魅力、勤務経験を通じて得た学びなどについてパネルディスカッション形式で語った。後半は、就職活動を控えた3年生が少人数グループに分かれ、それらが「職」の魅力を語った。

現職保育者院友と学生との交流会は、前半に塩谷香・同学科

# 国学研究者としての道を切り拓いた出会い



今でこそ国学と神道史を専門としていますが、初めから定まっていたわけではありません。そもそもかつて、本学に学部生として入学したのは、文学部の史学科でした。それも歴史が好き、というぐらいのもの。何かを極めようとしていたわけではありません。

大学1年生の時、国学の始祖とされる荷田春満が祀られている東丸神社に参拝した時も特に深い知識は持ち合わせておらず、まさか後に研究することになるとは思いもよらなかつたということは、以前もしたためたことがあります。

振り返ってみれば一つの大きな出会いだつたのが、当時

今では「神道と文化」へと名前を変え、私も講義を担当したこともありますが、とにかく当時の上田先生のお話が大変面白かったんですね。

神道の授業ではあったのですが、上田先生のお話の中心は国学でした。しかも、賀茂真淵や本居宣長といった、よく言及される学者に注力されるのではなかった。上田先生の『国学の研究』草創期の人と業績』(2005年、アーツアンドクラフト)、そ

全学共通で必修の教養科目であつた、上田賢治先生の「神道概説」という授業でした。今では「神道と文化」へと名前を変え、私も講義を担当しましたが、とにかく当時の上田先生の授業でした。一念発起して当時の本学の、文学部神道学科第二部、いわゆる夜間部に学士入学。やがて修士論文を執筆するに至るまで、上田先生にご指導いただきました。前段でお話ししたような、国学と神道史という視座において、国学草創期の荷田春満を研究するようにならざるを得ない、上田先生であったことは、上田先生あつてのことでした。

その後、博士課程後期以降は阪本是丸先生にお世話をな

「神道の復古」という視点から見えてくるもの

荷田春滿は、国学四大人の一人とされながらも研究が進んでこなかつたということは触れてきましたが、実はその理由に、残され、また研究のために整備されているテクストがあまりに少ない、ということがありました。古い全集はあつたのですが、ほぼそれのみ、という状況。私はテクストのみならず、社会的・歴史的なコンテクストを合わせて考える立場の人間ではあります。それにして手掛けた、というわけなのです。

ここまでエピソードに象徴的なように、私は決して主体的に生きてきた人間ではないのですが、おかげさまで現在まで研究を続けることができています。近年特に関心を抱いているのが、「神道の復古」というテーマです。

通説として、近代以降の神道史研究が回顧的に歴史を捉え返していく中で、近代に連なる神道のありようとして、江戸中期以降の国学者たちが形成した「復古神道」が発見されていきました。

史ではないのではないか、と私は見ています。やがて「復古神道」として収斂されていく前の段階では、ほとんど無名の国学者たちをはじめとして、古代の神道の捉え直しの仕方において、非常に多くの考え方方がせめぎ合っていたと思われるのです。「復古神道」という概念・史觀のみでは捨象されてしまうような、そうした多様なありようを、「神道の復古」という言葉とともに、再構成し、考えていくとしているところです。

天文学といった洋学を容していった自然科学发展の顔があり、また門が手がける農書にも携いつたという点で、農としての顔もある。木にも『眞暦考』というありますが、天体観測であります。しかし知識抜きに暦を考えることはできません。

このように、現在で的とも言われるようなありようは、国学の伝統に見いだすことができ和2(2020)年に木本文化研究所「神道・研究部門」が開催した国フォーラム「21世紀に國学研究の新展開 国学的な研究発信の可能性を探る」をはじめとしてから新たな国学のさら開、その前途が開かれと、私は確信している

神道文化学部・松本久史教授

国学は“終わった”学問ではない

二足のわらじではないですが、二本の柱を立てて、同時に研究を進めています。一つは、国学という学問を、近世中期の発生以降、現代に至るまで通時的に捉えていく、ということ。もう一つは、近世から近代へと流れていく神道史を考えること。この双方が、時に密接に絡み合いながら、私の研究を構成しています。

特に国学に関しては、「終わつた」学問ではない、今でも「ある」し、まだ多くの可能性を秘めているのだ、とうターンスをとっています。この見解について、徐々にお話ししてみたいと思います。

国学院大学日本文化研究所編『歴史で読む国学』（2002年、ペリカン社）の冒頭で私は、「国学とは近世中期に発生した、後世の文献や外国の思想に依拠することなく、日本古典の文献実証を行い、それを通じて古代の文化を解明しようとする新たな研究方法による学問」と書きました。

この特集をご覧くださっている方の中でも、国学四大人（荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤）、あるいは国学三哲（契沖・賀茂真淵・本居宣長）に関して、ご関心を寄せておられる方は多いことと思います。もちろんこうした重要な国学者の思想について学ぶことには大きな意義があるのですが、しかし『歴史

『で読む国学』は、異なったアプローチをとっています。

本書は私も責任者に名を連ねてきた同研究所「神道・国学研究部門」の研究プロジェクトの成果なのです。中でも、国学に関して各章を他の先生方にご執筆いただきました際に、近現代にも多くの紙幅を割くような構成を心がけました。そもそも、各國学者の思想を章ごとに紹介・詳述するのではなく、国学を巡る近世から現代までの歴史の流れを概観できるよう努めています。書籍の終わりに、私はこのように記しました。

「従来の国学の歴史に関するような、いわば『伝記体』的な国学史の記述が多く、通史的な国学を見通した本は必ずしも多くなかつた。本書は、近世のはじまりから国学の展開を跡づけ、現代における『国学』に関する研究までを視野に入れ、日本史の展開に沿つた『編年体』の国学史の構築を目指したものである」

こうしたことに関する課題は從来、学生を相手に授業をしていても痛感していました。国学に興味を抱いている学生が、賀茂真淵や本居宣長といった主要な学者の思想について述べることはでき

A photograph of a man with glasses, looking towards the right side of the frame. He is positioned in front of a bookshelf filled with numerous books, suggesting a library or study environment.

ていこうとした研究方針によるところがあるわけです。実は国学の研究というものは、各学者の思想的な主張、その内容ばかりを追うことになります。つまりがちである、という課題を抱えてきたと、私は認識しています。いえ、決してそうした思想面での研究を軽視してよい、と言うわけではなく、その重要性を踏まえた上で言うわけですが、テクストに向か合うのみ、場合によっては部分と部分を切り取ってつなぎ合わせているだけでは、その背後にあるコンテクスト、すなわち社会的・歴史的な背景を取りこぼしてしまうのではないか、という懸念を覚えるのです。

生まれているということ、そして稻荷社を巡る当時の状況を踏まえない限り、分からぬのではないでしようか。

既に確定しているテクストをもとにするだけではなく、きちんと、そして現代の最新の知見も踏まえながら幾度も、歴史の流れの中に位置付け直していく。それが、国学が『終わった』学問ではないと私が述べるところの、一つの意味合いになります。

さて、国学は総合知であるということをお伝えしたいのですが、そのためにも少し、私自身の歩みについてもご紹介できればと思います。当初は史学を学び、一般就職もした後に学問の道に入るという、遠回りした人間として、お話しできることがあるかもしれません。



## 箱根駅伝往路選手コメント

# 「たすきがつないだ仲間との絆と勝利への意志」



1区 野中恒亨(健体2) | 区間6位 | 1時間2分47秒

1年間の集大成の場だと思って臨んだ初めての箱根駅伝でしたが、緊張せず楽しめました。ただ、青学や駒沢と差をつけて2区につなぐという目標は達成できず、自分の弱さを痛感しました。この経験を糧に、来年こそはチームに貢献できる走りができるよう努力します。

2区 平林清澄(経営4) | 区間8位 | 1時間6分38秒

私にとっては人生そのものといつても過言ではない箱根駅伝。仲間の走りにとても助けられました。ラストイヤーの箱根駅伝は個人的には悔しい結果となりましたが、この悔しさを次の舞台であるマラソン

に生かして、個人として更なる成長を目指していきたいです。

3区 山本歩夢(健体4) | 区間5位 | 1時間1分54秒

区間賞を目標に挑んだ箱根駅伝でしたが、力不足を痛感しました。それでも、今の自分の力を100%出し切れたので悔いはありません。憧れの舞台は、自分が輝ける場所へと変わりました。この経験を糧に練習の質と量を高め、世界を見据えて努力を続けます。

4区 青木瑠郁(健体3) | 区間2位 | 1時間1分9秒

区間賞を取り優勝に貢献することを目標に臨みましたが、個人としてもチームとしても目標達成はか

ないませんでした。それでも全員が力を出し切り、胸を張れるレースができました。この経験を糧に目標達成へのアプローチを見直し、人間として成長していきたいです。

5区 高山豪起(法3) | 区間14位 | 1時間12分58秒

自信はあったのですが箱根の山は想像以上に厳しくもっと強くならないといけないと痛感しました。かなりきついレースとなりましたが得たものは大きかったです。落ち込んでばかりもいられないで切り替えて、次に向け練習に取り組み成長していくたいと思います。

写真・月刊陸上競技

## モーター・ボート・水上スキー部

## インカレ大会

## 男子ジャンプ団体優勝、総合3位

全日本学生水上スキー連盟と(特非)日本水上スキー・ウェイクボード連盟が主催する「第69回桂宮牌全日本学生水上スキー選手権大会」が昨年9月5日から8日にかけて大潟村水上スキー場(秋田県大潟村)で開催され、国学院大学モーター・ボート・水上スキー部は男子ジャンプ団体で優勝、男子総合で3位の成績を収めた。本大会には全国から10大学が参加。ジャンプ、トリック、スラロームの3競技が男女別に行われ、団体は各競技の選手の合計点で、総合は全

競技の総合計点で順位が決定する。

ジャンプ競技には松山晴信選手(史4)、鈴木優太朗選手(健体4)、阿部柊太郎選手(外文3)、伊東武流選手(経営3)の4選手が出場。松山選手が41.3mの記録で個人優勝、鈴木選手も39.8mで個人3位に入り、男子ジャンプチームは見事優勝を果たした。トリック競技で4位、スラローム競技で5位と苦戦したものの、ジャンプ競技の好成績が総合順位を押し上げ、総合3位となった。



優勝を飾った男子ジャンプチーム。左から  
阿部、松山、鈴木、伊東選手(同部提供)

## キックボクシング部



前列左から各階級のチャンピオン決定戦で王者に輝いた  
小林、木曾、喜多、貴田選手(同部提供)

## 全日本学生キックボクシング選手権大会連覇

昨年11月16日に後楽園ホール(東京都文京区)で「第93回全日本学生キックボクシング選手権大会～チャンピオントーナメント2024決勝戦」が開催され、国学院大学キックボクシング部は団体戦で2年連続21回目の優勝を果たした。

本大会は全日本学生キックボクシング連盟の主催で行われ、団体戦には10大学が参加。団体戦は3選手の合計ポイントで順位を決定する。また、6階級のチャンピオントーナメント決勝戦も並行して実施され、予選を勝ち抜いた12人の選手が熱戦を繰り広

げた。同部からはミドル級に木曾慎太郎選手(経営3)、ウエルター級に小林耀選手(経2)、フライ級に貴田皓太選手(法4)、フェザー級に喜多洸介選手(経3)が出場。4選手とも各階級のチャンピオン決定戦で勝利を收め、見事に王者の座に輝いた。さらに、個人戦の最優秀選手賞は喜多選手が獲得し、ベストバウト賞には日本大学の選手と対戦した小林選手の試合が選ばれるなど、同部の選手たちは大会を通じて華々しい活躍を見せた。

## ドリル競技部 SEALS

## 第24回全日本チアダンス選手権大会

## 「大学生編成Pom部門」連覇

(一社)日本チアダンス協会が主催するチアダンスの日本一を決める大会「ALL JAPAN CHEER DANCE CHAMPIONSHIP 2024 - 第24回全日本チアダンス選手権大会 決勝大会」が昨年11月24日に東京体育館(渋谷区)で開催された。国学院大学ドリル競技部SEALSは、「大学生編成Pom部門 Small・Medium」において2年連続の1位となっ

た。同大会は地区予選を勝ち抜いたハイレベルなチームが集結する全国大会。Pom部門は、演技の大部分でメンバーがポンポンを使用。ポンポンによる視覚的効果を取り入れ、正確にシンクロしたモーションでチームが“一つ”に見えることが求められる。同部は躍動感あふれる演技で並み居る強豪を抑え、2連覇を成し遂げた。



2年連続の1位となったドリル競技部SEALS(同部提供)

K:DNA ——創立143年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

## 陸上競技部

# 箱根駅伝 総合3位 「全員駅伝」で過去最高順位タイ

第101回東京箱根間往復駅伝競走（箱根駅伝）が1月2、3日に東京・大手町から神奈川・芦ノ湖畔をつなぐ往復全10区間217.1kmで開催され、国学院大学陸上競技部は過去最高順位タイの総合3位に輝いた。

1区を担った野中恒亨選手（健体2）は、スタート直後から飛び出した中央大学を追う2位集団で積極的な走りを見せ、2位の駒沢大学と8秒差の6位で2区の平林清澄主将（経営4）へたすきをつないだ。3年連続で各大学のエースがしのぎを削る2区を任せられた平林主将は、3選手が区間記録を上回るハイペースのレースとなる中、懸命に走り抜け4年間苦楽とともにした同級生で副主将の山本歩夢選手（健体4）に8位でたすきを託した。

3区の山本選手は力強い走りで、東京国際大学、帝京大学を抜き6位に浮上。4区の青木瑠郁選手（健体3）は早々に早稲田大学を追い抜き4位の駒沢大学を追いかける。そのまま区間2位の好タイムでたすきをリレーした。5区の高山豪起選手（法3）は初めて箱根の山登りに挑む。順位は一つ落としたものの、粘り強い走りで往路を5時間25分26秒の6位でゴールした。

6区の嘉数純平選手（健体3）はハイペースで進む山下りの6区を7位でたすきをつなぐ。7区の辻原輝選手（史2）は自身の地元・二宮町を区間2位タイのペースで駆け抜けた。先行する城西大学を追い抜き、



第101回 箱根駅伝総合成績

順位	大学名	総合記録
1	青山学院大学	10:41:19
2	駒沢大学	10:44:07
3	国学院大学	10:50:47
4	早稲田大学	10:50:57
5	中央大学	10:52:49
6	城西大学	10:53:09
7	創価大学	10:53:35
8	東京国際大学	10:54:55
9	東洋大学	10:54:56
10	帝京大学	10:54:58

以上、シード獲得（以下略）

佐藤快成選手（健体4）に6位でたすきを渡した。8区の佐藤選手は快調な走りで順位を一つ上げる。さらに戸塚中継所前で4位の創価大学と競り合い同タイムの僅差5位で9区の上原琉翔選手（健体3）へつないだ。

9区の上原選手は序盤で創価大学を振り切り、先行する早稲田大学を追いかける。9.6km付近で追い抜き3位に浮上するも、抜きつ抜かれつのデッドヒートを繰り広げ、最後は早稲田大学と並走し、1秒差の4位で最終10区の吉田蔵之介選手（経2=写真）にたすきを託した。アンカーの吉田選手は早稲田大学の後ろにぴったり張り付き、虎視眈々とチャンスをうかがう。17.4km付近で前に飛び出し、そのまま9人がつないできたたすきを胸に3位で大手町のゴールに飛び込んだ。目標の総合優勝は成し遂げられなかったものの、同部史上最速タイムの10時間50分47秒で総合3位となった。

### 前田康弘監督コメント

平林たちが素晴らしいチームを作ってくれた。本気で優勝を目指していたため、5年前にはうれしかった3位も、今年は悔しさを感じている。このまま3位では終わらせないので、OBや応援してくれる人たちの思いをつなげ、優勝という大きな山に来年もう一度チャレンジし、結果で示せるように引き続き頑張っていきたい。

## 復路選手コメント

# 「悔しさを糧に、『歴史を変える挑戦』は続く」



6区 嘉数純平（健体3）| 区間16位 | 59分41秒

高校時代から憧れ、走りたかった箱根駅伝でレースの流れを作ることを目標に挑みました。結果としてはふがいない走りとなり、チーム全員に助けられた形になってしまいました。この悔しさを胸に、来年こそ総合優勝を果たすために泥臭く練習を重ねていきたいと思います。

7区 辻原輝（史2）| 区間2位 | 1時間2分21秒

区間賞と区間新を目標に挑みましたが、達成できず悔しさが残ります。それでも力を出し切り、成長の糧となる経験ができました。箱根駅伝は、コース上で育った自分にとって陸上競技の原点であり夢の

舞台。102回大会では区間新記録を目指して全力で取り組みます。

8区 佐藤快成（健体4）| 区間7位 | 1時間4分46秒

区間賞を目標に挑みましたが、ポイントにしていた遊行寺付近で失速してしまい悔しさが残ります。それでも箱根駅伝は、これまでの感謝を伝える特別な場所。この経験を胸に、8区のコースのように人生の後半に向けてペースメイクを大切にしながら歩んでいきたいと思います。

9区 上原琉翔（健体3）| 区間6位 | 1時間9分8秒

区間賞と区間新を目指して挑み、前半は狙い通りのペースで走りましたが、後半に失速し力不足を痛

感しました。それでも、もう一度優勝を目標に挑む決意を固めました。今年達成できなかった優勝を来年必ず勝ち取るため、「強いチームづくり」に全力を尽くします。

10区 吉田蔵之介（経2）| 区間3位 | 1時間9分25秒

区間新・区間賞、そして総合優勝を目標に1年間取り組みましたが、悔しい結果となりました。それでも総合3位を獲得する形で、お世話になった4年生を送り出させて良かったです。箱根駅伝は「思いをつなぐ」特別な大会。この悔しさを胸に、来年こそ総合優勝を達成します。

往路選手コメントはⅡ面

写真・月刊陸上競技